The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

ラウンドテーブル　第５会場

文章表現技術指導をめぐって

【話題提供者（50音順）】＝大内善一（茨城大学），菅原稔（岡山大学），宝代地まり子（京都女子大学），町田守弘（早稲田大学）
【企画代表兼司会者】＝大内善一（茨城大学）

キィワード：文章表現技術指導，教科内容，作文教材，作文のスキル学習，作文の練習学習

１．企画の趣旨

大学生に小・中学校での作文学習体験について書かせると多くの学生が以下のような指摘をする。

「小学校の授業で作文を書く時というのは，何か特別な行事，例えば運動会，春の遠足，修学旅行などの後に原稿用紙にいきなり書かされるといったようなもので，どちらかと言えば苦痛であったような気がする。別に回を重ねる度に文章がうまくなるわけでもないし，書き方について指導された記憶もあまりない。」

この言葉が象徴している問題点の一つは作文の授業で〈何を〉教えようとしているのかが見えにくいという点である。従来の国語科作文授業では一時間一時間の中で〈何を〉教えようとしているのかが明確ではなかったのである。作文を書くための〈知識〉（＝学習指導要領に示されている「内容」等）は教えられていたが，文章表現技術（＝書く技術・作文技術）を教えることは稀であった。文章表現技術を教えることが即技術主義・形式主義として忌み嫌われる風潮が長くわが国の綴り方・作文教育界を支配していたからである。

確かに，小手先の技術を作文の内容との関わりを抜きにして指導するのは悪しき形式主義である。作文指導が形式主義となるのは，文章表現技術自体に問題があると言うよりもむしろ，この文章表現技術を指導する際の方法上の問題であることが多い。

これまでの作文授業では，例えば「事実と意見を区別して書く」という具合に，「知識」は教えられてきた。しかし，「事実」と「意見」とを区別するために一体どのような言語操作を行えばよいのかという，〈技術〉レベルでの指導が行われることは稀であったと判断される。確かに，作文活動は行われている。しかし，その活動を通して指導者が〈何を〉指導しようとしているのかが見えにくかった。当然の事ながら，その授業は子どもたちにとっても〈何を〉学んだのかが自覚しにくかったのである。

これからの作文授業では，子どもたちが一時間一時間の授業の中で〈何を〉学んだのかが明確に自覚出来るようにしてやらなければならない。そのためには，国語科作文領域における「教科内容」を文章表現技術（＝書く技術・作文技術）というレベルで具体的に提示していかなければならない。

国語科における「教科内容」は知識レベルだけのものではない。むしろ，知識を行為化するための言語操作の手法，すなわち言語技術自体も重要な「教科内容」なのである。このような意味での「教科内容」を国語科作文領域においても明らかにしていきたい。こうした考え方が今回のラウンドテーブルにおいて文章表現技術指導を取り上げた趣旨である。

２．検討すべき課題

今回のラウンドテーブルでは「文章表現技術指導」の在り方を検討することが目的である。この目的の中には端的に言えば二つの課題が含まれている。すなわち，①「文章表現技術」とは何かを具体的に明らかにすること，②「文章表現技術」の指導の在り方を具体的な事例に基づいて論じることである。

勿論，ここで言う「技術」が小手先の技術でないことは自明の理である。かつて三木清が修辞学の考察において指摘したように，単に「言葉の技術」のみということでなく「思考の技術」ということでもある。精神ぐるみの技術，魂ぐるみの技術と言ってもよいだろう。

このような意味での「文章表現技術」というものを具体的な姿で捉えていくことが①の課題である。②の課題はこの「文章表現技術」をどのような〈教材〉を用いてどのような〈指導過程・方法〉に基づいて指導していくのかという，一連のプロセスをセットにして検討していきたいと考えている。これまでの実践の中では，一応「文章表現技術」らしきものは示されてきているが，これが〈教材〉や〈指導過程・方法〉等とセットで提起されることが少なか

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

ったと見受けられる。

そして，これら二つの検討課題を組み合わせて取り上げていく際に，一つの実際的な足掛かりとなるものは既存の国語教科書であろう。既存の国語教科書における作文単元での文章表現技術の取り上げ方の過不足・適否について論じていくという方法である。それと，後述するような，既に民間において開発されている文章表現技術指導のための試作教科書や一部の実践家等によって開発された試作教材や実践事例等も検討のための手掛かりとなろう。

本ラウンドテーブルの提案者の方々には以上のような課題と検討のための足掛かり・手掛かりを参考にして頂きながら，出来るだけ焦点化された実際的な提案と討議とをお願いしたい。

3．文章表現技術指導に関する主要な先行研究文献

限られた時間の中での提案と討議とを実りあるものとするために，今回の企画代表者となった大内の方から今回のテーマに関わって大内自身がこれまでに考察を加えてきた先行実践・研究に限定して話題提供をしておこう。

（1）輿水実監修『作文のスキルブック』

本書における「作文スキル学習」は1964年に「高学年用」，1965年に「低学年用」が小学校学年別の6分冊で具現化されている。中学校用も3分冊刊行されている。このスキルブックには輿水実他著『作文スキル指導書』（低学年・高学年用の2分冊）が付けられていた。

輿水はこの指導書の中で「作文スキル」を「作文の書き方」とか「文章構成法」「作文法」等と言い換えている。輿水の意図は，戦前の作品主義の作文教育と戦後の活動主義の作文教育の何れにも欠けていたところの「作文活動の中にひそむ生きた能力，作文スキル」に着目し，これに適切な指導を加えていくべきであると述べている。

要するに輿水は「ただ何となく書かせて，書かせてしまってから，誰かの作品をサンプルとして取り上げて，ここはこう書けばよかったといって，共同批正するやり方」ではなく，作文活動それ自体の中で作文スキルを学習させ，そこに秩序を付けていくことを今後の課題として取り上げたのである。

輿水実の提唱になるこの「作文スキル学習」のテキストはその後1973年に〈新版〉，1979年に〈改訂新版〉と長く刊行されていた。ただ，大内が検討した結果から言えば，その中身は改訂を加えるほどに初期の輿水の意図するところから遠ざかっていくつかの問題・弱点が露呈していったようである。その詳細については拙著『作文授業づくりの到達点と課題』（1996年10月，東京書籍）において論述してあるので，そちらを参照せられたい。

（2）北村季夫編著『小学校表現力を育てる練習学習』

本書は1979年4月に東京書籍から刊行され，1990年1月に改訂版が刊行されている。この間，前著は1987年までに第6刷を数えているので教育現場に広く活用されていたことが窺える。

この「練習学習」作文は「作文スキル学習」と同様に技能訓練型の作文指導に該当する。「作文スキル学習」との共通点も多い。特徴的な点は「小単元方式による練習学習」となっていることである。従来の作品中心の作文指導に批判を加えて，学習者の思考・心理の状況を踏まえつつ，その「思考の働き」を訓練するところに目的が据えられている。方法的には，10分から15分あるいは1時間程度までの短時間で扱える「小単元」方式が採用されている。訓練型の学習ではあるが，学習者の思考・心理の状況を考慮して楽しさを誘発するような気力的な指導方法の開発が目指されている。あくまでも作文の基礎力の訓練を目指すところに主たる目的が饐えられていた。詳細については，前掲の拙著を参照せられたい。

（3）その他の先行研究文献

他にも様々な先行研究文献がある。各提案者においてはそれぞれ自由に取り上げて頂きたい。

さらに大内が検討を加えた文献を二点のみ取り上げさせて頂く。一つは言語技術教育研究会編『ことばの本1』（1980年）『ことばの本2』（1982年），言語技術の会編『ことば―言語技術1』，学習院言語技術の会編『ことば―言語技術2』等である。これらの先行試作教科書に関しては，大内による『先行試作教科書の検討が先決！』（『言語技術教育2』，1994年，明治図書）という小論がある。

もう一つは「見たこと作文」という実践に関して考察を加えた拙著『「見たこと作文」の徹底研究』（1994年，学事出版）がある。この中では「教科内容」としての〈作文技術〉指導に関して考察を加えている。他にも取り上げたい文献がある。これらについてはラウンドテーブルの際に可能な限り取り上げさせて頂きたいと考えている。

NII-Electronic Library Service